

大学図書館の将来

土屋俊
(千葉大学)

予定

- 「大学図書館不要」論
 - 電子化によって大学図書館は不要となる
 - もともと、あってもなくてもよい存在だった
 - したがって、大学に図書館は不要である
- 「大学図書館不要論」への反論
 - 大学の学生は図書館を必要としている
 - 大学の教員・研究者は図書館を必要としている
 - 大学が図書館を必要としている
 - 一般社会は大学図書館を必要としている
 - 大学の社会貢献 (教育面、研究面)
 - 知識の蓄積・継承

電子化による大学図書館不要論(1)

- キャンパス全体が電子化される (キャンパス不要論?)
 - 学生への通知、告知など
 - 事務連絡
 - 教員間の連絡
 - 成績の提出と処理
 - 教授会の議論をメーリングリストで
 - 人事給与管理のペーパーレス化
 - 電子入札・電子発注・電子納品
 - 遠隔授業・時差授業
 - 入退館管理、出欠管理

電子化による大学図書館不要論 (2)

- 学習・研究様態の変化

- 資料は、オンラインで入手 (契約は会計が)

- 学内のもの (教材、参考資料など)
 - 学外のもの (インターネット)

- 成果発表は、インターネットで

- 学術雑誌の役割りの減退
 - ピアレビューは生き残り得る (品質管理)
 - 大学の成果物としての研究業績

- 教育・学習の個別化

- 学生の個々人に特化した学習が可能
 - 箱入り教育による効率性の終焉
 - 選書は不要 (自分に必要なものをPay Per Viewで)

電子化による大学図書館不要論(3)

- 紙は残るが、
 - 印刷の本、雑誌は、完全自動書庫を利用して保存
 - 分類配架は不要有害(オンライン検索から電子請求) 書庫内はサイズによる最適化
 - サーキュレーションデスクの完全自動化
 - ICカード、ICタグによる自動的追跡
 - 複写管理の自動化
 - ILLは、ArielとIlliadで
- 置く場所を「図書館」と呼ぶだけ
- 搬送システムを確立できれば、地下倉庫から学部直送も

もともと不要論

- 「本の置き場」であり得たか？
 - 研究室貸し出しとは？
 - (予算ないのに) 体系的コレクション形成？
 - 開架の一般化
- レファレンスが行われていたか？
 - 教員自身がレファレンス・ライブラリアン
 - 日本の学問の翻訳体質
- 雑誌購入を図書館はやってきたか
 - 予算は教員の管理
 - 専門的知識を持つ図書館員はまれ (「図書館学」の罪)

かくして、大学図書館は不要である。

- 反論の構成

- 学生からの需要
- 教員・研究者からの需要
- 大学運営から図書館への需要 (情報基盤)
- 一般社会からの需要

- まず、

- 「情報化」「電子化」を再考
- 「大学改革」を再考
- 上記、需要動向を検討して、あるべき姿を探る

先進国社会の不可避の情報化

- 「電子図書館」と「インターネット」のアナクロニズム

1993年 NII(通信と放送の融合)

1995年 GII

(日本で国会関西館構想、電子図書館建議)

1996年 日本でのインターネット爆発

1997年 インターネット社会へ(図書館はまだCDROM)

1999年 電子ジャーナル普及へ

- オープンなインターネットを社会情報基盤とする

- 社会の「神経」としての情報通信システム(電話、POSなど)

- モバイル化(PDA、Iモードの展開、WAP規格など)

- 電子図書館としてのWWW

昨今のいわゆる「大学改革」

- 主として国立大学がターゲット
 - 税金の無駄遣い論、特別会計の赤字、定員削減、大学全入時代、生涯学習化への対応
- 1990年代年の政策
 - 設置基準大綱化
 - 大学院重点化
- 90年代後半の展開
 - 点検・評価
 - 競争的環境
 - 教育の重視

大学改革の方向性

- 高等教育の状況

- アメリカ・(日本) 型 (50%)

- 12年度日本では大学40%、短大9%、専門学校20%

- イギリス・ドイツ型 (30%)

- フランス・ヨーロッパ型 (10%)

- 発展途上国型

- 日本の大学改革

- ドイツ型帝国大学方式

- 戦後の大学大衆化

- アメリカ型二重構造体制 (研究大学＋4年制学部大学) への移行？

大学改革・情報化からの図書館へのデマンド

- 教育機関としての社会的役割
 - 学部レベル教育の教養化
 - 修士レベル教育の非学問化
 - ⇒学生から見て使える学習図書館
- 研究機関としての社会的役割
 - 先端研究の推進 (学術情報の円滑な流通)
 - そもそも「研究」概念の変質が予想される
 - 研究成果の移転の推進 (情報発信)
 - ⇒研究者から見て使える研究支援機能
(本はすでに消えている)

学習図書館構築不可能論

- 学生用図書の圧倒的不足
 - 国大図協の調査(1998年) 1人新刊書0.6冊
 - もう遅い、誰の責任か (図書館の責任ではない)、国民的不見識 (自民党文教部会報告)
- そもそも学生は本を読むのか、読ませることに意味があるのか
 - 「受験勉強が忙しくて、本を読む暇がない」
- 教員は本を読んでいるのか？
 - 何のための教育？研究よりも読書
 - 情報リテラシー教育の真の課題

生涯学習と大学図書館

- 地域の情報 (学術的)
- 図書館の開放、地域の異館種との分業
- 生涯学習こそが大学が生きる道
 - 半分以上が24歳以上になる日は近い(アメリカなみ)
- この目的から演繹される図書館の役割
 - 場所
 - 中身
 - Walk-in Useの正当化

図書館運営における教員の役割

- 図書館資料の収集への責任
 - 学習用：教員として
 - 研究目的資料：研究者として
 - 千葉大学の試み（資料予算の一本化、基本的外国雑誌、キャンパスグレイリテラチャの体系化）
- しかし、自覚は欠如している
 - 技術の進歩について知っているか（自分の研究方法でやっているかと盲信、「電子ジャーナル問題」で顕著）
 - 学生のために本を買うという自覚はあるか（研究室に本を置く意味は？）

電子図書館と図書館自動化

(建議という間違いは別にして)

- 「電子図書館とは何か」がわからなかった
奈良先端の不見識
目玉電子化方式
二流論文収集方式
標準化努力欠如
⇒需要研究の欠如 (誰のため、何のため)
- やっと電子図書館の姿が見えてきた
 - アクセス(利用) : 学生向けと研究者向け
 - プリザベーション (保存) の二義性
- 図書館員のスキルの問題はもうない

情報化による

学術的コミュニケーションの変容？

基本的には1980年代インターネットによって
研究者が自分でコミュニケーションを制御
できるようになったはずだが、

⇒現実にはそうは展開していない

- － 学術雑誌はどうなるか？ 電子ジャーナル化
- － 学会はどうなるか？ 旅行は楽しい
- － 授業で使う教科書はどうなるか？ 紙の教科書
はいつまで？
- － 小部数専門出版はどうなるか？ ひつじ書房

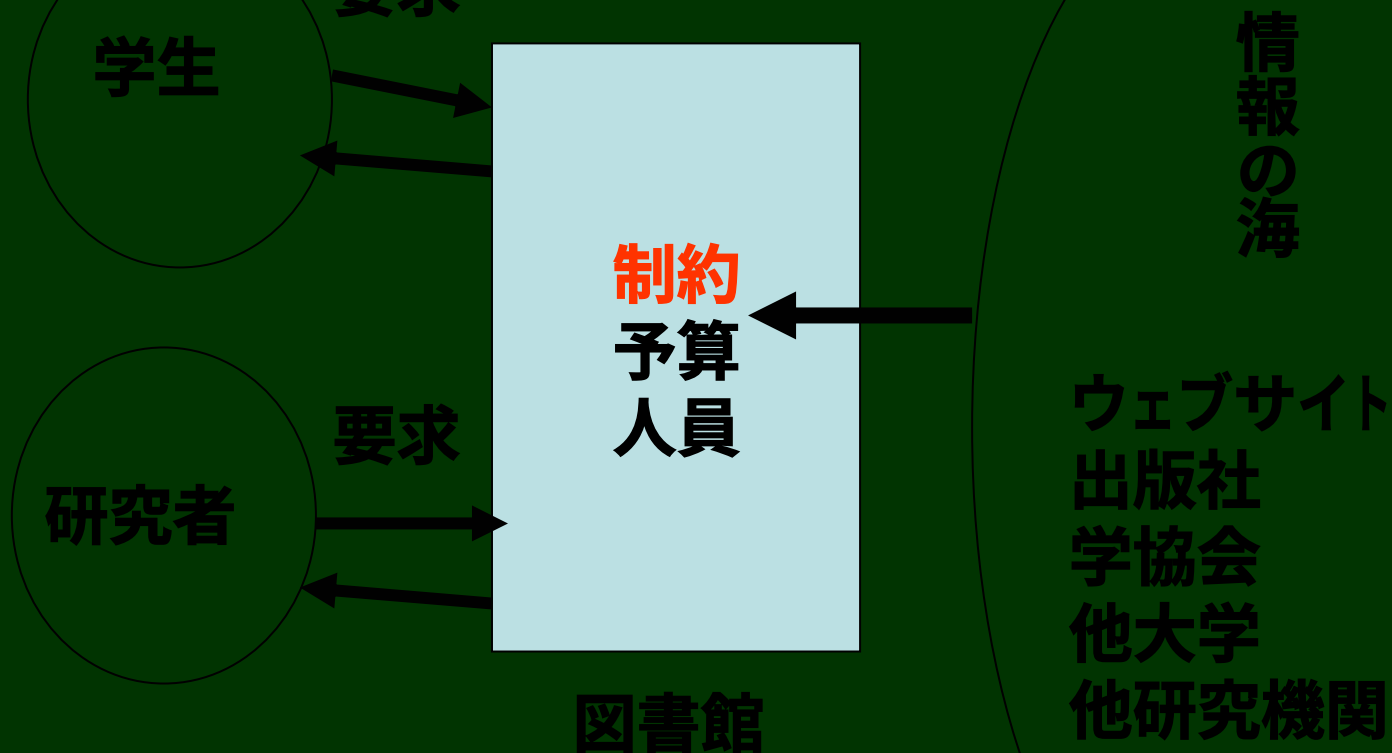
⇒これらすべてに教員はまったく無自覚

大学における大学図書館の役割の将来

- 学生に自分で勉強するように仕向ける (つまり、本を読ませる) のは図書館しかない
- 教員に世の中の情報化を思い知らせるのは図書館しかない
- 大学運営における情報基盤の重要性を自覚して、実際に構築するのは図書館しかない (ちなみに情報屋さんの出番はもう終わったかもしれない)
- キャンパスの中と外とを「契約」によって仲介するのが図書館 (発信も一応含めて)

アクセスとゲートウェイ (という観点から)

ゲートウェイからインターフェイス (導入、著作権など)

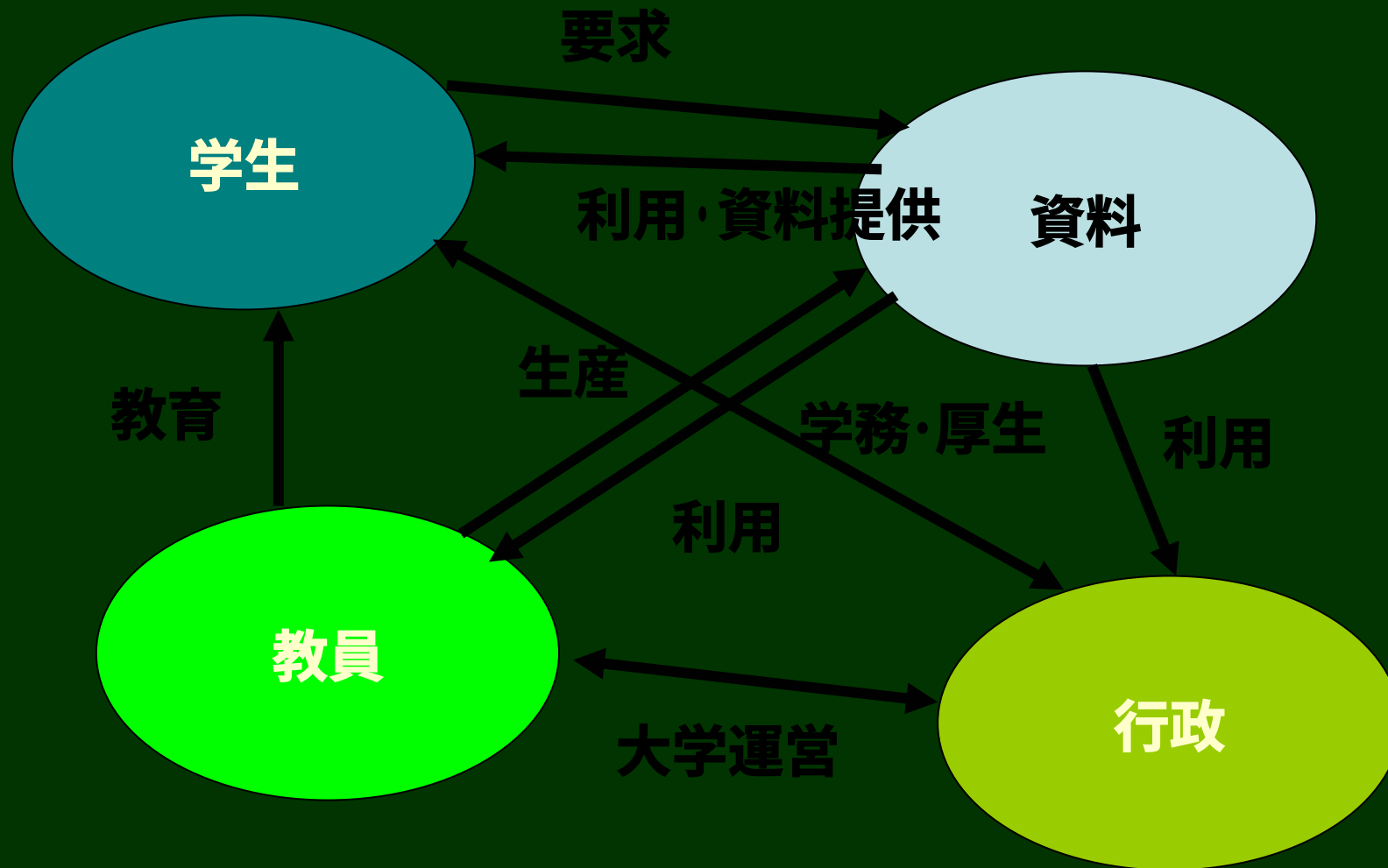


インターフェイスからアクセス・ファシリテータへ

21世紀のキャンパスでは情報基盤が本質的

- 多様な背景の学生が自分の条件に応じて、自分で学ぶ (パートタイム学生・進路変更学生の増加、いわゆる「学力低下」の本質化: 準備なき学生への教育の一般化)
- 対面教育と遠隔・時差教育の使い分け (教室の意味の再定義)
- 運営手法の効率化 (統一IDと共通データベースに基づく学生・教員管理、電子的コミュニケーションによる会議の削減、権限の分散化による即時対応、対外・学内文書交換の電子化など)

大学の情報基盤とは？



図書館員のイニシアティブを求めて

- サブジェクト・ライブラリアンは教員で代用 (ただし当面)。研究の直接支援はこれで十分
- 学生相手のリテラシー教育は積極担当
- 契約・業務管理 (外注)・学内連携が主要任務
- 図書館は、情報基盤のすべてにかかわり、図書館が大学の情報基盤を作るしかない
- それが、次世代の図書館像を規定する
- 図書館は、大学の目的と現状を理解して、大学の目的の実現を支援してほしい